

第四章

戦争の体験ゝ入隊そして戦場ゝ

前略、私の場合、戦争体験を言えるか、どうかわかりませんが、
 中学四年の時(五年制)第一期陸軍特別幹部候補生を
 交戦し、そして、やがて二次試験をやるからという連絡も
 あり、青森県八戸教育隊へ行き、二次試験と
 ころから次の日から入隊と言われ、なりました。今でも
 これには、さすがに甘えにかゝつたところと、こころが、
 内地部隊とは、言え、暑さや寒さ、一年半で、私の
 青春はすべて、お国の為という大義名分での訓練と
 シンクに終ったような気がします。いざ、いざ、いざ、
 にかかわりを持てた私は、これらの事実を、いえることは、
 ありません。戦争で、死なうとしたのです。あそこ、いかに、
 も、特攻隊員(六十八才)

石田 須藤 貞雄

私が海軍の八田部航空隊にいた頃です
終戦前近い真夏でした。私共はドラム缶の中に体を
入れ、周りに火薬を詰め込み、九十九里浜に埋めて
もらい、竹筒を外に出して呼吸ができるようにして
待機し、敵の戦車が上陸してきたら我が身
もろ共爆破する特攻隊になるよう言われ
ました。わずか19才の若き身であるのに「聖戦」の
ために、という国の言葉を信じて自らの命を滅する
決意を肯定することができたのです

恐ろしいことは、このように若き命に対しても死を
肯定させるような徹底したウソの教育がなされていたこと
です。地球の今を激しい争いが行われています。
その争いに打ち勝つための恐ろしいウソの教育が
行われているのです。（ミカドが）人間同志が仲良く
できる教育が今こそ必要なのです。何が真実
であり、何が大切かということと自ら判断できるよう
に幼少の頃からしっかり教育することです。そのようにしっかりと
した教育がなかったら世界平和に役立ちません。

なお、広島、長崎の原爆投下について米国はあれ
これと正当性を主張していますが、東京の空襲の
人まで大量に殺りく（行為）に正当性は全くない
ことを付言します。（「匿名」希望）

豊田 匿名

私達の部隊は北京に滞在し、特殊の隔離病棟・伝染病
 病棟をもつ、衛生防疫に關する部隊でいた。戦況もいよいよ激烈を極める頃、一特攻隊員が伝染
 病棟に赤痢で入院して来た。戸へ検出が()になった
 ので、私どもの内科病棟に移して来た。
 まだ微熱及下痢症状が続くなが、日明日、同期の無二
 の戦友が飛龍立つので、どうしても一緒に行きたい、
 是非退院させてほしいと、涙をうかべ希望して来た。
 急がすとも全治して立派な身体で飛龍立つべく
 考えたが、聞を入れず、たつこの願いがやむなく、
 担当医に事情を説明して特別の計らいを
 以つて、治療退院手續を経て退院させた。
 飛龍立つ時には、私達の隊の上空で旋回するといふ
 ことだった。外科、病棟全員が見送つてあげた。
 特攻隊の彼等は一人ひとりが純直でまじめなつくづく
 感心したものだった。
 半世紀を経た、今になつて、とどめるべきだったかと
 悔やまれようせん。

平成6年8月

私どもの部隊は伝染病などの重症患者を収容及び衛生防疫に努める部隊です。
昭和十九年の中国河南作戦に参加の際、私(衛生下士官)は部隊駐屯中には現地の通訳と共に周辺の部落を毎日宣撫に廻りまわした。数日後からは、凡そ胃腸病、外傷などの手当てをすませるのに忙しかつた。
ある老母には物盗りと思われ、可成り今更にはこのリウの一本と小豚の一匹の他何もない。命だけは助けくれと云われることもあり、また。その後は食糧も乏しく、届けるようにまいりました。
或る日、部落民数名が部隊に助けを求めにきました。部落の村長(河南鄭東城内清真寺の李世瑞牧師)が本末明へ路軍の襲撃を受け、重傷なもので至急手当をほしいと懇願されたので、直ちに軍医と下士官各一名中に選出され、出向きました。
可成り骨損傷が縫合手術完了、命は取り上りました。
部隊駐屯中にはホライ交換を続けた。その後殆んど治療が完了した父、該村長より戦争が終つたらフーテン(父親)、フーテン(母親)と一緒に遊びにまわしてほしいと云はれたことが、いまだに強く印象に残っています。

青梅市

笠原 隆毅

戦後半世紀を経て、歴史の陰に忘れ去られた少年の悲劇を描いた漫画映画『蒼い記憶』が上映されるとのこと。盛会でありますように祈念するものです。

戦時中、国策事業として満州開拓の予備訓練施設「東京市七生拓務訓練所」が日野市にあった。ここは茨城県内原の満蒙開拓青少年義勇軍訓練所の補助機関として東京市が音頭を取った。東京市から義勇軍には四個中隊八三六名の少年たちが参加し、ここから満州へと送り込まれて行った。そのほかに七生村を中心にした「東京報国農場」が満州に建設されて、多くの青年男女が参加して汗と流した。満州開拓の現地責任者であった五十子巻三氏は七生村出身。満州国政府の要職で開拓総局のトップ。今日の農林大臣に当たる。敗戦で犠牲者を出したが、隣の多摩市連光寺には満州で亡くなった犠牲者を慰める公苑「拓魂」の碑が建てられていて、東京都関係の犠牲者たちもこの墓碑に祀られている。七生拓務訓練所については、平山探検隊の小林和男さんが多摩史談会誌に発表して詳しい。拙著の『義勇軍ラッパ回想記』に当時のことを書きました。別便で謹呈申し上げますのでご覧下さい。

前略 私は現在68才の年金生活者です私が
現在の日本の皆さんにお伝えした事は生活水のこと
です。昭和20年4月に満洲大に北支の北京に兵隊
となり、20年8月敗戦。ソ連の捕虜となり、オーストリア
に生き、帰国が出来ず。23年12月、シベリヤにて重労働
に明け暮れ、居りました。が、其の間毎朝の洗面又
歯みがき（口すすぎ程度）にはコップ一杯約200ccの水を
口に含み、それを「グヨク」と手の上に出して首ぐら
い、顔、口すすぎとして使用して来、毎日でした。今日でも
私は水道の蛇口より流し洗は出来ませんが、勿体ないのです。
必要のものは使うべき事が合理的で、無駄は止めたものです。

一枚の葉書で、おじも兄も従兄も、成人の
男達は みんな戦場に馬匹り立てられ、そして散た。
働き手と失つて残された家族の事など、家庭の事情
など一切おこまなし。情け容赦なし。それが義務
だったからです。その名のもと何の意見も言えなかった。
義務だったからです。憲法に記されているからです。
結果は敗戦。身内で召集されたものは一人も乗
りませんでした。南方の野戦病院で、中国大陸
輸送船に乗って撃沈された。一かけらの骨も
届かなかった。親達は誰にもこの悲しみも
恨みも言えずに、胸の中に とじこめたまま死
んでいった。成人士せて結婚し、孫の顔も見
ることもなく、人間のおたりおえの幸せを知ること
もなく、息子のとろに旅立つて行った。
おじの子、従妹たちは人並み以上の辛酸をな
めて成長した。みんな自力で生きなければならな
かった。家は 思い出といふのに空襲で焼失
した。無一物になった焼け跡で、分厚い漢
和字典がその子ま灰と化していた。あめ状に
なったガラス。涙が出て止まらなかった。

八王子市 武内 みよの

終戦後一年位たったある日近所の方から
 新聞を持て「おばえんこんな事が新聞にのつて
 いふと、かけこんでまてゐました。母と一踏に
 拜見いまして、何と云になつた英霊と
 と言う見出しで何人かの名前がのつてゐる
 兄の名前も何県何郡何村何某と
 はつきり住所氏名が明記されてゐる
 そんな馬鹿な母の眼がうは大粒の悔し涙がこぼれ
 落ちる今日は明日はと復員局にも再三上京して調べ
 てもうたかゆのすゝこんな新聞を拜まつては腸の
 煮えくりかえるようだとはこんな時を申しさすか
 今の世のやうなう泣き入りはしなかつたでしようか



東京版「ナガエミクリ」・佐藤富治郎 画

秋川市 岸野 識子

私は昭和十二年十月十二日の夜召びす
近歩四騎隊に入隊昭和十二年十一月
三日午前二時頃朝食命令があり
抗洲壕の上陸がありました幸り
昭和十四年十一月未召集解除
い帰る未きた私一人の胸に秘して
さくのもこの際報告しきりた。
尚總給不適格者でありきり(おオ
因に)

多摩平

荻野

倉次

八月十五日(男の夜) 元海軍特務隊員
 「総員オニデフキ整列」の号令一過、上甲板に整列、
 木村司令が、只今より玉音放送がある、とたゞそれだけ、
 我々は、遂に本土決戦の時が来た、と直感し、血潮がたぎった。
 ラシオからピーピーカーという雑音に遮られ、乍らもし
 玉音が聞こえてきた、種々の緊張と興奮が、意味がよく
 理解出来なかったのは、私一人ではなそうだった。
 「日本が敗れたのだ!!」と一言だけ言って、軍力を杖に
 男砲臺に並んだ司令の決意の引締った顔と想い出す。
 おれから41年経った、今も若者に言いたい。絶対、戦争
 にまき込まれてはいけない。私は青春を海軍に捧げ、
 空襲で母を失い、初志の戦うまで失くした、吾々が青春
 を国に捧げ、国を憂へた様に、国は吾々と憂へてくれただ
 ろうか。

戦後半生紀述を経て終戦時小学校二年生だった初に
戦争体験として語る下料は極めて断片的で語る資格
があるかどうか。戦争体験と云ふものは中国上海より
引揚げた。当時下今の存亡又自由は中国に行ける日まで
ある夢に思われていた。
戦争下期の連日の大空襲の恐れ。学校を名ばかりで
しるは小生をすくぶかり出された勤労奉化。次々に出征
する先と方々が見送り。終戦と同時に衣達は日本人
には反乱を起した中国人達。殆んど五月のみにて、
そして引揚げた状況はわが方が不安の多い引揚げ船
り。このとき。博愛で収容生活。辛く苦しく非人間的
等々を感ずる以下幼な過半が当時の親達には人間的
辛く、生きると云ふことに命がけだった。この一丁大人

郵便はがき



/	9	/	-		
---	---	---	---	--	--

日野市日野本町
七〇五〇二二三

日野市中央公民館
一枚ハガキ係

百
草
匿
名

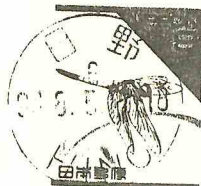
達には留るべきを
念ひ助け合ふ力強
かに
わが心は幸運で残
留孤児にならぬに
清ん びん 今も尚
中国に残るか
ろ子供達の姿は
お心から離れること
ない (匿名希望)

1	9	1			
---	---	---	--	--	--

終戦のあの日、天皇放送の後、私たちの部隊（電報探知機）は思いもようぬ即刻部隊解散ということになり上も下への大騒ぎとなつた。私たちの屯ろしていた千葉県房総半島実端が米軍の最初の上陸地兵として指定されたそうで無益な抵抗などあつてはという上層部の配慮だらうしい。私たちは翌十六日追ひ立てられるにして部隊を後にした。私の、その復員途上のこと。十数時間もかかつてやつと東武線浅草駅に辿り着いた。改札口を入ろうとした私は突然武裝した十数人の常歩兵に取り囲まれ「コラッお前どこへゆくつ」とどやられた。逃げてきたと思われたい。洗ひがらの軍衣を脱ぎ、もう一脱走兵のようだったのだらう。いくら弁明しても聴き入れられず、いままさに銃剣でひと突き、にされそうになつた時だった。私たちのやりとりを遠まきに見ていた何れも銃突者らしい人達、中には遺骨箱を拾っている人もいた。

郵便はがき

191-□□



日野市日野本町
七・五・二二
日野市中央公民館
一枚のはがき係小街中

突然、そのうちの一人が
「もう戦争は終つたんだ、
私たちにはたまさかといで
と大言で言うところ、さう
から、さうだ、さうだ、
という大合唱が始まつた。
意外な場面展開とな
つて、さすがに憲兵一団
はスゴク引きさがさるも
得なくなつてしまつた。
お蔭で私は難をのがれ
無事改札を通り車中の
ひととなることができた。
今でも時々いなか（栃木県）
へゆくが、あの改札口を通る
毎毎懐心やることがない
ものも覚えてる。

南平

山田

絹次郎

マニラにつく前日、サンフェルランドの沖で船内司令に立っていた私は「飯上げ」をかけましたが米軍潜水艦の魚雷攻撃で中止となり、皆武装して退艦体制になった時、私は大便にいきたくなり、武装をはずして四番船槽の横の大便所に行きました。そのとたんに二番船槽に魚雷が当たりすぐに引き返して、三番船槽のデッキの所迄戻った時に、手がふり足がふって来て、デッキに腹わたの出た人が「ウーン」といって生きており、やがてくると白いまなこを出して、ぐったりしたのを見、二番船槽の甲板上の友達は一人も残っておらず、残った私ははじめて「戦争とはこれだ」の認識を持ちました。輸送指揮官と共に退船ラッパをきいて海にとびおりましたが、ポカンと浮いた体に「ウキ」の有難味をつくづく感じました。

昭和十八年八月三十日、満州ノ普拉爾^{フウラール}に居いた一時同半程ある兵舎にいた。酒保^{サカベ}、
 (要店)に十枚一組の兵隊用内務班(平常の生活)が印刷された。葉書と買つた。
 その葉書に書いてあるのは、さうさうい文章と十枚の葉書に續いて二つ
 の文章にいた。内務班に郵便箱が木製で柱にくくりつけである。私は夕食の
 ときと、一枚のポストに入れた。毎日一枚づつ投函したのである。私は寺野
 今、新島五郎が四谷五郎と葉書断に住んでいて、四谷見付は、新島方面、大野屋
 足袋店へのついでであつた。私は、河内、かういふ方、フィリピンへ行き、フィリピンから日本へ
 敵前上陸用舟艇を渡りしに帰つた。帰る船内に、ハラのうすい若者が五人以上あつた。
 石島、江崎分隊(入隊)は、私は、A型赤痢で入院し、退院後、西部八部隊(山口県
 伊保左村)へ部隊へ、終戦直前に宮城へ、家へ、方、疎開した。葉書の事
 が、いふなり、母親に手紙を、葉書は朝の十時に私の渡すといふと、十時前後
 まで、手紙をいふと、葉書は、内務班の、通書と、兵隊、本部で、手紙を
 も、駅まで持っていく。満洲鉄道の便に、せき、鴨緑江を渡り、釜山に付く
 同、父、近縁、離れ、朝鮮下の、海、山陽線、東海道線、東京中央線、郵便
 局、四谷の家を、規則正しく、日本の行政は、動いて、いふ、鉄道、郵便
 大いなるものと、今日も、感心している。

昭和一八年八月三十日、満州の普拉蘭フルランに着いた。一時間半程歩いて兵舎についた。酒シュ保ホ（売店）に十枚一組の兵隊内務班（平常の生活）が印刷されている葉書を買った。その葉書に寒いとか暑いとかさしきわりのない文章を十枚の葉書に続いて一つの文章にした。内務班に郵便箱が木製で柱にくくり付けてある。私は夕食がすむと、一枚そのポストに入れた。毎日一枚づつ投函したのである。私は当時、今は新宿区だが四ッ谷区若葉町に住んでいた。四ッ谷見附から新宿方面、大野屋足袋店を入った処である。私は満州から南方フィリッピンへいき、フィリッピンから日本へ敵前上陸用舟艇を受けとりに帰った。帰る船内にパラチフスが発生し、50人以上が広島、江波分院へ入院した。私はA型赤痢で入院、退院後西部八部隊（山口県伊保庄村）の部隊へ……。終戦、両親は宮城の実家の方へ疎開した。葉書の事が気になり、母親に訪ねた。「葉書は朝の十時に私が洗濯をしている時、十日間続けて来ましたよ」と言った。葉書は内務班から週番上等兵が集め、本部でまとめたものを、駅まで持って行き、満州鉄道の便にのせ、安東から鴨緑江を渡り、釜山に着き関釜連絡船で下関へ渡り、山陽線、東海道線、東京中央郵便局、四ッ谷の家と、規則正しく日本の行政は動いていた事になる。鉄道、郵便、大したものだと今でも感心している。

三沢 齋藤 俊光

5.15.ノ河東省石川市教育隊入隊より20.ノ旧満洲興成飛行場終戦。
 5.15.ノ石川市旅団司令部部轄予班。5.17.ノ航空隊燃料終戦まで
 主戦場。中五大陸。トナ。海軍。台。舊。旧満洲。朝鮮半島。(沖縄戦を以て)
 今後は。用戦。空。司。司令部。予班。の。体験。した。こと。を。記憶。により。事。
 5.16.ノ。予。司。司令部。参謀(中佐)の。司令部。内に。宿。班。の。何。味。止。
 重要。事。報。知。の。解。説。等。を。せ。よ。事。前。下。命。あり。
 5.17.ノ。予。後。事。夜。勤。方(は。さ。予。前)中。予。西。隊。の。軍。通。信。所。より
 軍。最。高。機。密。の。ある。希。紙。付。の。軍。機。を。報。知。配。達。せ。られた。規則。と
 情。の。予。後。校(班。長。少。尉)の。解。説。する。こと。に。な。つ。て。いる。の。で。直。ちに
 警。戒。宿。舎。に。送。送。した。が。名。目。の。班。長。は。前。の。解。説。を。消。滅。し。て。は。な
 の。指。ま。あり。予。面。軍。司令部。の。予。報。内容。は
 「アサヒ、アサヒ、予。前。の。時。に。あ。つ。た。は。相。互。大。規模。の。作。戦。が。開始。され
 後。に。し。て。一。兵。士。は。別。断。出。来。な。い。が。英。と。用。戦。する。とは。思。な。かつ。た。
 唯。今。の。予。の。年。を。課。目。と。う。く。や。つ。た。所。い。と。つ。つ。や。う。な。こと。に。な。り。て
 印。象。が。残。つ。て。いる。用。戦。の。覚。え。を。い。ち。の。は。司令部。全。員。集。合。の。二
 方。の。後。旅。団。長(中。将)の。指。達。を。い。ち。の。は。司令部。全。員。集。合。の。二
 特別。の。行動。は。な。か。つ。た。よう。に。記憶。し。て。いる。

S 15・1 河北省石門市教育隊入隊 S 20・8 旧満州興城飛行場終戦。S 15・7 石門市旅団指令部暗号班。S 17・3 航空隊転科終戦まで主戦場、中国大陸、ベトナム、海南島、台湾、旧満州、朝鮮半島（沖繩戦参加）。

今日は、開戦当時指令部暗号班で体験した事を記憶によりしるす。S 16・11 末より指令部参謀（中佐）が指令部内に宿泊、暗号班にいつでも「重要電報あれば解読持参せよ」事前下命あり。

12・7 小生後半夜勤務（12・8 午前）中、午前四時頃か、軍通信所より軍最高機密である赤紙付の軍機電報が配達された。規則上暗号将校（班長・少尉）が解読することになっていたので、直ちに将校宿舎に連絡したが、名目上の班長は「お前が解読参謀に持参せよ」の指示あり。方面軍指令部発の電報内容は「アサヒ・アサヒ・午前6時」であったが、相当大規模の作戦が開始される位にしか一兵士には判断できず、まさか米・英と開戦するとは思わなかった。唯、今でもその時参謀が「とうとうやったな」とつぶやいたことが深く印象に残っている。開戦が発表されたのは、指令部全員集合の上、当日午後旅団長（中将）から指達されたが、当日後も指令部としては特別の行動はなかったように記憶している。

程久保 匿 名

中五四川省成都(32)基地攻東(攻東不能の箇所の
決死行)

攻東用使用機99双程(通常機、航続巨リ片道600km)

漢口→成都片道1000km)

8.19、父畑總軍司令官(元師)若杉登謀(現三愛宮)

に送られて、日休の記憶ははっきりしないが、茲暮に

胴体四に二ヤ製増槽(20)増設に改装した99双程に

野に少隊操縦、前方座席や生塔乗、燃料弾の

搭載一枚の航空宇宙真をたうに成都(飛行時間

3時間)強固な今後、成都上空と思れる位置に到着

したが、基地の確証不能、敵夜戦機がうろくうろく

のさすを要する基地をいさ、箇所に攻弾攻撃不明

夜半すぎ、基地に収束、被弾(機中重全機収束した。

中国四川省成都B 29基地攻撃（攻撃不能の箇所への決死行）攻撃使用機99双軽（通常4名、航続距離片道600 km位、漢口―成都片道1000 km）S・19・12畑総軍司令官（元帥）若杉参謀（現三笠宮）に送られて、日付の記憶ははっきりしないが、薄暮に胴体内にベニヤ製増槽（200ℓ）2本積載に改装した99双軽に野口少尉操縦、前方座席小生搭乗、50 km爆弾8ヶ搭載、一枚の航空写真をたよりに、成都（飛行時間3時間、3時間30分後、成都上空と思われる位置到達）したが、基地の確認不能、敵夜戦P 61ブラック・ウイドウのよう撃を受ける。基地とをぼしき箇所に投弾戦果不明、夜半すぎ、基地に帰還、被弾一機出撃全機帰投した。

程久保 匿 名

大東亞戦争で引揚の途中外地で一死をせし夢思を思い

「不要不要」と満語まじりの片言とは、今また耳に聞えぬことし

大陸を背負い逃れし若き母、小き子、骸にいと夜添ふ寝す。

此月に思えば、おつしき重き五子ありしが、大花の煙の何と軽しも。

初孫へ帰国待ち侘が父母に、遺骨差しおし何と告げなむ。

長らえて七丁路となる母、われは汝れにふえし乳房かゝるむ。

矢折の五子へお命を引きつめて存命に生まなむと願う母、われ

5年8月

94日ソ不可侵條約を破り滿洲國に侵入して来るを、ソ連軍に

對し着うみ着うみ、牡丹江市の被害を、子供と背負いいく

は、この金環とありぬけり。戦争の最中、何の手

あもしてやれぬ悲愴を、我んといまう。悲しい悲しい思ひおす。

落川 古谷 正子

第五章

原
爆
体
験

郵便はがき



李力

191-□□

日野市日野本町

七一五〇二三

日野市中央公民館

一枚のハガキ係御中

昭和十五年七月五日日野自
 動車でバニヤをされ、町内皆
 さんの「のぼり」で日野本町の
 ハ坂神社へ、瘦身美髯の土湊
 客司が武運長久を祈つてくれ
 た。羽近衛工兵隊へ入隊、近衛だけ
 に昭和天皇の白馬の山則を、代々木
 練兵場で紀元二千六百年の分列
 行進し、十一月西園寺公の国葬
 の日に、宇品より上落へ渡り、
 南京、セツカン作戦と歩を回り
 シンガポール、ジャワ上陸作戦
 ハラオ、台湾、フィリピン
 ラバル、ニューギニアと
 戦戦、ニューギニアから戦隊
 が二十名ばかり、内地へ
 帰校教育員要員として
 在島の宇品へ帰る
 以上、戦時体験だが、私は何と
 云つて



空を爆弾に遭遇した事が体験としては大い、宇品町は爆心地より四キロ地点
である。陸軍々曹として、無疎演習をしてゐた八月二日八時十五分あたりか
うすれ、色に燃り次にドワーンと大音響音と共に身体が吹き飛ばされ
見る見る空が暗くなり雨の様な振る舞ひの雨落ちてゐた
時が経つに、したがい、市内全滅の報が入る。

市内に生る班と、隊に残る班とに別れ、私は隊に残つた

佳木

続々と来る、焼くした人達の手当て、死体を一ヶ所に集めて作業に

明け暮れ、八月十五日天皇の勅放送も全員集まつてきく

こゝで吾々兵隊の任務は終りだが、この状況では家郷へも返れず

相替らず救済作業をし、九月十五日頃、原爆落ちて一ヶ月十日ぐらゐ

たつて、日赤が来てくれた、こゝで復員命令

日野の新町の家に帰りつく、軍隊生活五年二ヶ月、私二十八才

妻二十六才、一女、四才、これが私の体験である。

新町 松本 季男

我々船組工兵（敵前上陸用舟艇、大型登船機約二〇〇人、小型登船機約三〇人）
 は山口県室屋津に海岸に八月六日に爆撃がなされた。部隊のA隊（南門）が
 試験に合格して喜んだ父親は右島へ軍刀を買って祝賀した。休戦して右島へ渡
 りに行くと、父の口から「おめでとう。三日すぎた頃我々の部隊が右島へ二週間の予定で派遣さ
 れた。私は残さず西岸部隊にいた。」
 一週間すぎた部隊の帰るまで、父は右島の部隊は全滅し三人の生き残
 った、それと顔中包帯を付けて目隠しをして、女の人を囚えていた。右島の先を渡
 して、出ていく足がけを焚けた。右島には古本佐の川や市内を洪水している。爆撃した
 人は、その川で飛込んだ。飛込んだ人は、その川で飛込んだ。飛込んだ人は、その川で飛込んだ。
 我々の舟艇は原佐を渡航し、一ヶ所に止まり、右島の佐佐木佐の川で飛込んだ。
 原佐、一隊は簡単な舟に乗り、原佐、一隊は簡単な舟に乗り、原佐、一隊は簡単な舟に乗り、
 飛込んだ人は、人は皆同じ様に、一ヶ所に止まり、右島の佐佐木佐の川で飛込んだ。
 右島にいた隊員は、右島の佐佐木佐の川で飛込んだ。右島にいた隊員は、右島の佐佐木佐の川で飛込んだ。
 爆撃機は、二ヶ所の間は、原佐、一隊は簡単な舟に乗り、原佐、一隊は簡単な舟に乗り、
 降参に、右島の佐佐木佐の川で飛込んだ。右島にいた隊員は、右島の佐佐木佐の川で飛込んだ。
 本と下は、右島の佐佐木佐の川で飛込んだ。右島にいた隊員は、右島の佐佐木佐の川で飛込んだ。
 八月十六日の夜、右島の佐佐木佐の川で飛込んだ。右島にいた隊員は、右島の佐佐木佐の川で飛込んだ。

三 沢 齋藤 俊光

我々船舶工兵（敵前上陸用舟艇、大型発動機約一〇〇人のり、小型発動機約三〇人のり）は山口県室港に（海岸）いた。八月六日に原爆が広島へ落ちた。部隊のA軍曹が士官の試験に合格した。喜んだ父親は広島へ軍刀を買いに行き被災した。休暇をとり広島へ探しに行ったが見つからなかった。二、三日すぎた頃、我々の部隊が広島へ一週間の予定で派遣された。私は残されて留守部隊にいた。

一週間すぎ部隊が帰って来た。処の話によれば、広島の前線は全滅し三人が生き残った。それも顔中包帯だらけで目だけ出していた。女の人の白いブラウスは原爆の光を反射して、出ていた足だけが焼けた。広島には六本位の川が市内を流れている。被爆した人は、その川へ飛び込んだ。飛び込んだ人はそのまま死んだ。屍体は六本の川を埋めた。我々の舟艇は屍体を曳航し、一ヶ所に引き上げるための任務だった。屍体一体だと簡単に舟も走るが、屍体二体を引くと舟足がおもく進まなかった。飛び込んだ人は皆同じ様に、格好をしていたと不思議がった。広島に行った隊員の殆どが下痢をした。放射能の入った水を呑んだからだ。被爆地区は六十年間は草木は生えないだろうと言われた。除隊になり広島の前線を通った。松の葉が、半分以上が焼けて半分下はみどりだった。

原爆の八月六日の日を迎え思い出した。

三沢

齋藤

俊光

私達は広島の田舎に疎開していました。終戦後の事です。山の小学校に集団疎開していた子供達が一人、二人と鉄道にそって脱出し始めました。焦土の広島市からのお迎えが来ません。みんな当時の貴重品だったカラ傘を持って歩いていました。今あの子達はどうしているか？と胸が痛みます。私も父を広島城近くの女学校で亡くしました。父は教壇に立ったまま、孫のように可愛がっていた生徒さんと煙にまかれました。数日してその場で水晶の印かんの二つに折れたのが見つかり確認出来ました。カフスボタン。おせんべいのようにふくらんだ10匁銅貨。妹と号泣し乍ら掘りました。不思議に焦土は静かで、水道の水だけがチヨロチヨロとアチコチで出ていたのが印象的でした。人の命の尊さ、平和への祈りを忘れません。

“教え子と名を連ねたり原爆忌”

高幡
金沢
須磨代

終わりには。 | これから白い服を着なさい。

「これから、白っぽい布で作った服やもんぺを身につけるように。これは軍からのお達しです。」

八月の十日頃、夏休みでも勤務動員ののために毎日登校していった女学生の私たちに校長先生は訓示なさいました。

「た島に落とされた新型爆弾は、もうすごい閃光を発します。今日の黒地の衣服は、光や熱を吸収し易いから、これをはね返す白い衣服を付けるようになったのです。」

そういわれたのも衣料も統制、衣料印符があつても品不足で布地が買えるわけもなく、また家中の衣服を捜して揃えた物は、父のシャツを作り直した長袖ブラウス（当時、は暑くても昇降をあまりしに出すことは危険で、全身を覆う衣服であつたと母のセリの着物が薄い藤色だったのを、それをほいけいぐんべいで連日の勤務動員に出かけて行ったのです。級友連もこれ

それと夫と白っぽい衣服となつていました。軍の命令は絶対。新型爆弾の恐ろしさも分からぬまま、ひたすらお国のために頑張った夏です。そして八月十五日の玉音放送で戦いは

東村山市

村田

美枝子

第六章

終戦

ゝそして

戦争の悲惨さを語りつぐわけでは戦争の再発を防ぎ
得ない。戦争に突入した原因を追おし、その原因を二重
とつくりだす事が大事である。先の第一次世界大戦は軍部や
一部の政治家、特権階級が天皇制を利用して、報道規制の
もとで国民をたぶしから利用したものである。国民は国民で「億
一心」とか「靖国の英霊」とかいう美名にもとめられていたとい
ある。「聖戦」ともという言葉をあり得ない。今も中近東
ではジハード(聖戦)という言葉で戦っているのを見れば判る
だろう。国民一人一人が政治に対して批判的な目と、逆説的視
点を持つなければ戦争はくり返されるだろう。そしてそれ
は投票の一票にかゝつていふことも認識すべきである。

小平市

仲谷

虎之助

私も比支の農村で終戦を迎えた。その時受けた電文は、この度天皇陛下の命により、世界は全面的に和平となる、この後一切の戦斗行動を停止せよとの内容でした。その後国民党軍に武装解除されるところとであつたが、北上が遼水、中共軍の攻撃で多くの戦友が殒れたが、蔣總統の「暴を以て暴に報」報いる勿れの発言で、半年後復讐することが出た。昭和という時代は世界恐慌と国内不況を皆見事に軍部が独走し、遂に破局を迎えた。軍の平秘にいた人物とは如何なる人物か、非常に優秀なところとあるが、人間的に致命的な欠陥を持つた人間の集りではなかつた。三年間の軍隊生活で、職業軍人の異常性を存文味あつた。その戦斗内容は、祖未すぎるのではなから、北の戦場は張彭峰、ノモンハン兩事変では全滅し、残存は婦女子のみ、居留民の放置、六万の捕虜、御留問題の疑惑等、爾はヒエス、戦はず海、葉屑(私の原隊)餓死、戦病死、傷病兵の放擲、今も多くの将兵が眠る戦場、悲惨極まるというのである。負戦の時は責任者は自決するものが、占来よりのしきたりではないのか、それなのに全部では無いが、層のまもなく内地に歸還してゐる。同じ敗戦国であるドイツでは自国の戦争責任を明確にし、永遠に従軍他国民の補償を行うを基本とした。今だに戦争の眞実も、誇持ある歴史観も持てないようでは世界に対し、恥ずかしい限りである。

小平市 笠原 文次

戦争中のことは四十年以上たった今
も忘れぬことはあきまません戦争にかり
あされる国々の人がいかに死んでいった大
量金も今ついでにばる投金、中量金も
弾丸のかわりにつかわれたりする テレビで
グリメのせいにな食物の番組をみると
楽しいこともおいしいものも何も知らずに
死んでいった若い人々たちを思うつ
つ涙があふてきます戦争は殺し合いです

多摩市

栗林

哲子

戦争が終つて四十年以上ですから戦後生れこも
中高年の人の時代で戦争は別世界の事としよう
私は物心ついた時から戦争中で知つたから戦争
に召集される近所の小女さんやお兄さんの見送り
をし死んで白い布につつまれとお骨を迎えていま
した。学校へ入リアメリカの飛行機が空を襲うとく
るようになると尚学校へいつても土をほって防空
こうをつくり逃げたりかくれりりで余り勉強もあ
りませんでした。二十才以上までは生きてもいられな
いだろうと思つていました。たまたま焼死にしました
沢山の思いを子や孫に書き残したいと思つています

多摩市

栗林 哲子

終戦間近の暑い日。高射砲の弾が敵機に
命中し、翼がくるり^(まわ)と回転しながら落ちる様子
に拍手した事。豪州兵が河原で死んで居る
のを見に行つた事。間もなく敗戦日まで
口々に石をぶつけた事は内緒にする事と。
婦女子はかくいる事だったが忘らふせんが
進駐して来たアメリカの兵士のやさしくマ、
ジョーシートやガムをくち渡して受けた思い出が生涯
残りまふ。間もなく南かいた近く、青野蘭科

郵便はがき

191-□□

日野市日野本町

七十五一二三

日野市中央公民館

一枚のハガキ係

御中



日

野

鍛代

年子

宅(二階)の教会で
喜あせを頼う祈り
を果命に教えるマ
頂きました。
平和を頼う人生を
築くのみです
末筆ながら公民館
の皆様の活動に
心しく感謝を
申上げます
1911

$$\frac{1}{\sqrt{2}} \begin{pmatrix} 1 \\ i \\ -1 \\ i \end{pmatrix}$$

戦争は、訓練、準備、計画等は、基本を習ひ、舟や汽車の
のみ方等、合戦の場よりいふと大要である。合戦、戦死
とはいふ事、戦争は、相手国と戦いはかりなく、上官が部下の預
けつて、統制をとるやり方の反感をもつた、終戦近く百々戦と
なつてゐる、統制のと水なるものも、食糧糧食不足の憂、奪得等
あり、ちよき事はあり、相手を曲す倒し人ほ、いかに思ふは
算うて口をつぐみ、苦言に苦言を重ねて最前線へ入る人は戦死、
批発的、無断で前線へ出づらん、我々同じ兵でも、重傷を負ひ様
一ぱ、死んでしまふ、生かして実戦作戦は必要の事と思ふが、千人十色人
それぞれだから、是れをうまくに、

戦争の時召集になり軍務に服した人は、皆戦争に参加したという考え方です。

戦争は訓練、平素の生活等含めて、基本を習い、船や汽車に乗る方法等、合戦の場へ行くまでが大変な苦勞で、合戦、戦死となります。戦争は相手国との戦いばかりでなく、上官が部下の頬をなぐって統制をとるやり方に反感を持つ者。終戦近く負け戦となつてからは、統制がとれなくなつた処や、食糧の不足の略奪等生きるための苦勞があり、相手を撃ち倒した人は「いやな思い出は葬って」と口をつぐむ。苦勞に苦勞を重ねて最前線へ出た人は戦死。比較的兵站などで前線へ出なかった我々同年兵も、年を重ね毎年の様に一人づつ死んでいった。生々しい実戦体験は希めないと思うが、十人十色人それぞれだから、参考までに。

終戦直後、外に光が透れないように六畳に
 張紙、暗幕を取り払ってみると、作業場の内
 には女子寮のみんなは、年頃になつてしまつた
 黒い紺の服かう色のあつちを着てゐる。私は母のやれ
 をよめて、それが好きな色に染まらぬに満足して、あ
 らの模様が染まらぬといふ風に染めさせた。ふくらみは
 多岐胸の母の帯地の地帯をへストとつら。それかやれを
 かくしてくれた。胸をはってよめさせられ
 仕事から帰ると、おなをばらから持ってきた形、あ
 りともほいさ一枚の布にして、やりくりをしまかり新しい
 形になつてゐる。あつち
 中た、冬は重くはつちオチない。時々は
 ストートのまわりを囲み、手縫いといふおなを
 焼く。石炭の音が聞えます。

東豊田

志村

昭子

終戦直後、外に光が漏れないように窓に張った暗幕を取り払ってみると、軍需工場内にある女子寮のみんなは、年頃になっていました。黒、紺の服から色のあるのを着たくなり、私は母のゆかたを染めて、それが好きな色に染まったのに満足して、ゆかたの模様が浮き出ていても気になりません。ふくらみはじめた胸も母の厚地の帯でベストをつくり、それがゆれをかくしてくれたので、胸をはって歩きました。

仕事から帰った寮生は家から持ち寄った形あるものをほどこき、一枚の布にして、やりくりをしながら新しい形につくりかえます。

まだ各室にはラジオもない時代です。ストーブのまわりを囲み、手縫いしている寮生と燃える石炭の音が聞えます。

東豊田

志村 昭子

赤いリボン口いゝよせて……

戦争が終つて明の時代になつた象徴の歌として

挙つた水。歌です

雑草まで食べた食糧難 D.T. の頭から

まで真白にしてもらへなかつた ミラミ、フットも

靴下もない寒さ。雨が降ると傘もなく休

んだ学校。二部授業や青空教室の学校

私はあの歌と同時に思ひ出す 暗い時代

です。テレビ、ラジオでこの歌が流れると

今でもスイッチを切つてます。

程久保

中村

寿美子

第七章

封書・資料ほか

昭和20年
4月

私は終戦時三鷹市に住んでおりました三鷹は
当時軍需工場地でした年月も過ぎ松も老朽に
なり記憶もはつきりしないようにすの毎日昼と
なく夜もなく空襲のなか逃げまわっておりました
其の日午前二時半頃空襲警報で外に出たら
真昼のような明さだった事かと思えるうちに
シューーと爆弾が落下されました（明るさは
照明弾で初めてでした）爆弾はすぐ爆発せず
落ちた次より煙が出るとさわいいていました
警言防団の方が時限爆弾かも知れず安全の方に逃
げる声をかけ何回もなく走りまわったが爆弾
が落ちて三十分四十分が次々と爆発しました
爆発が終り人々が家の週りに帰る来た時にはせまい
道一つ前の三十メートル位は全部が半分こわれ
ありまわった朝夕に顔見知りの人達が見つかり来
ててくれた

男と若い人は皆兵隊に工場に取られ後に残る
家族が心配で家の下に深い防空壕が掘つて
あり早く逃げるようのが声が聞えなかつたので
しよう全員爆死されまゐた年よりと子供がい
した二十名位の方々でゐた近くの小学校校舎が軍
の諸所になつて兵隊さん方もまゐりまゐりまし
たが防空壕の上に家がたゐり某の下にたつたので
全員堀あされた時は十二時近くなりまゐり時間
がたつていたりして生存者は一人もありませんで
全員顔や体がうづ血を張れ指の爪の間に土が
入つておりどんなにか苦しかったでしよう顔では
だれだかわからず着衣で見分けまゐりたが鼻に
に御遺休をたうべた時にやあまりのむごさに
も涙も出ませんでゐた明日は残つてゐる者の番か
何時もの覚悟をきめまゐりた生きられたいと

(下度松邸に)

畑一つ先に時の陸軍大臣がおられ死者に何かと
手をつくして下されたいと思ひますが金では空
しいもかづと
もう二度と戦争がありませう世界各國がこれ
だけ願っているのにどうして地球上から戦争がなくな
らないでしよう本当に悲しい事です一日も早く
世界中に平和が来るよう祈つております

おあかりにひとところもありましょが松が一番
身近で見た事ですこの思ひが生まれている
かぎり忘れられませう字が下手で申しわけ
ありませんお役にたてますか

南 平 長屋 ひろ子

平和への祈りあらたに

金子哲也

歴史の悪夢の一幕を四九年前の八月九日に
さかのぼってこのマブタにやきついた光景を
思い出しつゝ、平和の尊さ、人間愛の尊さ
を多くの人に知ってもらい、核戦争という、
一部の人間の欲望の為に生み出した、そして
地球上の生物を滅とへと導く核爆弾（原子爆
弾）、それが広島と長崎の上空にさく裂いた
地獄絵図への幕入りの前振れが如何に静かに
訪れたか、そしてその幕入りを見ることか
できたこと、それは一人の十三歳の少年の運命

を生へと導いた神のみの知ること、と、
八月九日、学徒動員をサボリ、長崎市寿町
の家を飛び出し長崎駅へ、不定期な列車に飛
び乗り、警報で諫早駅ストップで下車、徒歩で
愛野村へ、途上同方向への姉さん達三人と静
かな千々石湾を右手に一路、その時、右手長
崎上空にB29の機体、あB29だ、あB29だ、あ落下
傘だ、あ、あんだ瞬間に目のくらむ様な閃光、
三人はその場に倒れ込み、しばらくして声で
本音の無事を確認立上る。さきほいまでの青
空は、乱雲の如き直黒な雲（原子雲）太陽が
直視できる有様、その時長崎浦上では地獄絵

巻が展開されていたとは知る由もない三人、
一路愛野村へ、これが命運をわけたほ人の一
瞬の出来事とは、八月十五日の終戦後、長崎
に帰り山里町の叔母宅を済すか一面がレキと
焼野原、そして甬の動員で残骸、死体の整理
聖昭和二十一年秋、父、母、弟、妹達七人
の満州よりの引揚げ、やつと落着いた、家族
揃つての平和な生活、
被爆、満州での終戦という戦争の結末、一
歩間違えれば悲劇の物語りとなるもの、良い
結末へと展開したことを神に感謝しつつ、
又、逆に悪い結果となつて半世紀の今日、

被爆の証人すら得られないまま、原爆の後遺
症に悩まされていく人も多くみられることを
考へるとき、三度許すまじ原爆を叩くとの
声を、叫びとして次の世代へと引継ぎ、

核戦争、核兵器廃絶への道を地球上の全人
類が手を取り続け、世界の青少年の笑顔と、母の
愛に包まれた地球を永遠にと願ってやみませ
ん。

来年八月九日には、思い出の海星中学の帽
章を胸に五の年前の足跡をたどって平和のす
ばらしさを、この胸に刻みこむつもりです。

多摩平 金子 哲也

想ひ出すこと。

毎年、夏がくると思ひ出します。

私が小学校三年生のとき（昭和九年七月八日）父がサイパン島で玉砕しました。当時サイパンに出征する直前、二泊三日の仮泊で家に来たとき、また戦死の公報が家に届いたとき等、断片的ですがそのときの情景が浮かんできます。

父が仮泊で帰ってきた昭和九年五月四日の晩、近所の神社のお祭りの準備のため子供達が集まることになったといまう。うしろ髪を引かれる思いで私は出かける。少し休つと頭が痛くなり小学校の先輩達に連れられ家に帰りました。父の膝にながれているうちにすっかり良くなり安心して父の話聞くことができました。

それから二ヶ月程たった夏の日、戦死の公報が役所から届いたとき、祖父から様子を聞いた母は外にあって井戸端まで走り出てしゃべり込んで長い間泣き止まずにいたことを私は庭で遊んでいて覚えていました。終戦後、家の近くの道路を夜中に革靴で歩く足音がすると母は父が帰って来たのではないかと耳をそばだてていることが続きました。

苦難な時代を通り抜け、先日、父の五十四忌法要を行きました。不思議なことに位牌の後ろの字裏の願がうかすかにコトコトと音が聞こえます。

供養を感謝している声だと思えますが、

それとも戦争の悲惨さ、むごたらさを忘れぬでと云っている声だったのでしょうか。

平成元年八月五日

武蔵村山市

内野 定年

今朝、毎新開、設上で、館につきの、のりも、入るて
いたたまきました。私は大正13年、それ、いそん、戦争を、保
験と、あ、ます。た、ふ、古、冬、迄、松、ふ、町、で、立、籠、に、あ、い
家を、焼、け、ら、ま、した。
一九四五年、五月、二十、日、
六、二、丁、に、へ、こ、に、移、住、こ、こ、い、て、へ、ま、立、籠、に、あ、い、
駈、こ、の、新、町、に、の、け、て、一、面、の、焼、野、ろ、お、に、な、り、て、
此、を、か、その、ま、ま、様、に、わ、り、て、いた、現、い、光、子、を、み、
あ、した、その、あ、ろ、う、さ、は、ま、た、ま、た、に、焼、き、つ、て、あ、ま、あ、
け、わ、と、い、ふ、は、復、讐、し、現、在、の、あ、ま、ろ、お、の、中、に、お、い、ま、は、
い、は、を、し、て、あ、ま、あ、
二、人の、師、を、さ、ら、る、こ、を、か、ひ、き、う、ま、え、
同、好、の、新、井、は、二、人の、師、の、鑑、魂、を、う、ま、え、と、い、う、わけ、は、
こ、い、う、ま、え、か、二、人の、師、の、足、跡、を、た、つ、ね、て、御、地、を、三、日、

今朝毎新聞 読上で、館にこの、の、を、入、ま、
いた、ま、ま、た、は、大正13年、ま、れ、い、ろ、ん、野、を、保、
験、と、あ、り、ま、す、た、ま、は、古、の、冬、迄、松、ふ、り、で、空、腹、に、あ、い、
家、と、焼、け、ま、し、た、
一九四五年、五月、二十、日、

六二五、
 新町に
 移住して
 一面の
 畑を
 有る

此者ム
 そのまま
 櫻にわこ
 現
 光字をみ

けわい、
 ね、は後方し。
 浮き、
 してあ、
 半、
 旧満洲で、
 非業の死をとげた

天下の師を忘るゝ一と云ひて、

同様の事件は、二人の姉の鑑魂堂と、うわけたら
こゝろをんな。二人の姉の足跡をたづねて、彼地を三日

詔力ーにときの証を収めあつた
は参考に（？）のわがまゝに
は収めよう

一九四四年八月

日野市中央公民館

八王子市

斉藤 英子

過去の記憶というものは時を経るにつれてたゞかしくも感じられ、また美しくもなるものと思う。物資はなくとも二度となら青春は青春でいた。空襲が激しくなるにつれいつか死ぬかもしれないと思いつ日本の人ロが1/3になつたら戦争は終るそうよ。私達は生き残れるかしらと同級生と話したこともありました。女学校三年から四年にかけて学徒動員で海軍の零式水上偵察機のフロート組立て作業に従事して勉強はできなかった時代でした。工場の休憩時間に煎り大豆を同級生と食べたのかともあつた。男や女やとして席を同じくせず、女ばかりの学校時代でいたのに工場では中学生(旧制)も動員されていて職場は同じでほのかに憧れもありました。食糧は戦中より戦後の方が厳しく米軍かう放ちされたとうもうこし粉、パイナップルの缶詰などかあ米の代替として配給されました。蒸したさつまいも一ををお辨當に持て行ったことも

あります。子供にこんな物しか作せやれなかつた母親の気持ちも
つらかつた事と思ひます。沈没した船かう引上げた
水いたしの黄色くゐた米も配給になりました、煮ても芯が
硬い。こんなお米でも空腹を満たすため不服も言はずに食べ
ました。現金よりも物々交換が有効なので、すかさず空襲で
金も焼失した我が家は家族の衣類も充分ではな
い。お米と交換する着物などありません。戦災に遭つた人と
遭わなかつた人との差をうらめしく思ひました。

三 沢 藤井 和子

50年前 私は女学校 二年生でした
一年の時から学校が 都内でも早く
学校工場になり 航空本部所属
として ドラムかんの代用品として
紙と竹で製紙 ドラムかん 作りによげみまた
戦時中 南方方面を占領して 油が
取れるので 飛行機の燃料を作つて
どこかに運ぶのに入れる物が無いので

造りまゐた

ボール紙にのりを一ヶでつけて少しかわいた所に竹をうすくさい物を敷きつめて又ボール紙にのりをつけたものをばり一つ出来上ります。その時ののりが赤ぢやの粉ミルクで作ったものと牛や馬の血で作った血粉のりとカンカゴムとかいつてまゐしたか。自轉車のパンフはりの甲なので三つめいめいにはり合せて作った

物を おもりで押して かん金につけ
たものを ドラムかんの 底一の丸みに
カッとして 丸みの所にも 細長いき
れこみのある紙で ぼり次に上下
丸い紙にのりを つけたものを 空気か
へうない用 に 手で 細かく こすって
張り出 来上りでした 材料がた
りないため こっ三っ 作る だけでした

多摩平

壱岐 よし子

軍事郵便 (立川市 佐藤 睦)

戦地で負傷をさつたり病氣に
なされた兵隊さん方の慰問に
家族や友人達とよく病院へ
伺っております。

その時の兵隊さんや
おいさから
頂いた葉書をひき

膝さん過日は御慰問有り難う御座居まいな度々の御
訪来厚く御禮申し上げます自分達も御覽の様に元氣で
再起御奉の日を待て居りますから自分達の事は御心配
なく貴女方は鏡後でこれからの日本を背負ふ^{前九時}様
立派な體を作り又立派な火眼なる様友達皆^{休禁止}勵ま
相つて立派な人になつて下さい貴女からお父様お母様に
もよろしく又米一君へもよろしく米一君は回つてすから良
勉強をする様^{芳子さん}には別に便りを書きまゝ左から
益々と暑さも厳しくなつて参りますから體を大切に
米一君へも特別によろしくでは又便り致しますさあうなり

二年生の時の担任の先生が
お紅さんへ
わたくしも生徒は淋しい
ゆもりでぬえりしことを思い
きくす
戦地の先生から頂き
給葉書です

郵便はがき

大阪市住吉區万代

西二町目三

石井睦 様

満洲軍安有村は
河島中官四部隊野口隊

小林雅敬

庫事 郵便



(陸軍糧食部發給)

お便りありがたう

満洲もいよいよ暑くなる

来あした雨もよく降ります

野山も見渡す限り

こい線に包まれています

兵隊さんには皆大変

元氣に御奉公して居ます

から安心して下さいよ

いよいよ四時のおたよりをた

んで下さる。あ、私も大急ぎ振

にあたりそぞろい。事、おま

身体も大に勵んで下さい

東京・芳洋紙印行

学童疎開児への母からの手紙 (南平 土屋 由男)

由男さん其の後も大善に天孫を孫子家へ致しました

お母さん毎日々頂かわらすで話しいがゆ便にも出来ず
すみませんが由男さん毎日天孫で過して居る事と信じ
て居ますのでいつも安んじて居ます

お父さんも飯田からお歸りに成りました

甲田様とやらのお家に大善にゆせ話になら小の由

近いうちにお母さんからもゆ禮の序と紙差上げ様と思ひます

うたが 今朝家の近頃はゆすまひに成て居ら小の序

田様のゆ親裁のちが見えら小色々とおけなしを伺ひました

こちらからもお禮申し上げますが由男さんからもよろしく申し上

げて下さい

があまり毎日々何れ致す事、ゆゆめ感になりそうですから

よく、氣をつけて下さい

由男さんが預て行きましたさつまいもが二百おすゝも取れました　ほへうにあなたに見せたの様でした

又つちまが三本も取りまして大きいのめ四十センチにも成りましたに　先日ひどい風が皆おちてしまひかつかりました
十月から大兄の面會があるとの事　ですがそれ小も学校で面會月もきめて下さり　順々箱に送るのたさうです

又先日送りしました豆　お母さんが書きました水でしたか　皆さんにもお介けいしましたか

小食の物も送る事が出来た事にて二小からわ　学校で
吊ゆもの出た品だ　に　する様にとのお父さんが申し小ました
色々不足な事　に　困る事　も有りませう　昔戦に勝つため
なので　すから元来でか　八様　に　とお父様か　申　さ小ました
さる又も　今　しょうけんめいで　作つて　います

釣の道具も近所に　看板から買つて来ます　今日隣組に　来りました

下駄が由男さんにちやうど良いのがあたりましたからそれを持つて行きます

ただ人涼しくなりますから風を引いて先座様方には心配をおかけせぬ様にくれぐれおたのみです

宇田様へゆづり便り申すか今頃とこのお家でも配給の土色々といそがしい時ですからなまぐし申す敷をおかけせぬ様にくれぐれおたのみです

でね又お便りします元氣でねお父さんお母さん

信ちゃんにやよろしく

ゆき

由男さん

寄贈書籍ほか

◎ 櫻井甚作著（東村山市・村上芳信氏寄贈）

地獄からの生還―ガダルカナル戦　かく生き抜く―

◎ 山口節雄著・寄贈

あゝ義勇軍ラッパ部隊《回想記　満蒙開拓青少年義勇軍》

◎ ふじい　まさのぶ作（大久保昭男氏寄贈）

ハトのお爺さんの話―ヒロシマ平和公園より―

◎ 齊藤英子著・寄贈

歌集　はなのむこうに

◎ 旭丘小学校昭和二十四年卒業合同クラス会編（村上芳信氏寄贈）

戦中・戦後のわれわれ　えごの花

◎ 河邑厚徳編著（桑原ぎん氏寄贈）

昭和二十年夏の日記

◎ 「守山国民学校」（阿部悦子著・寄贈、抜刷り）

◎ 「自動車隊奮闘記」（齊藤俊光著・寄贈、抜刷り）

◎ 「あゝ義勇軍ラッパ鼓隊・出版ニュース第四号」（山口節雄氏寄贈）

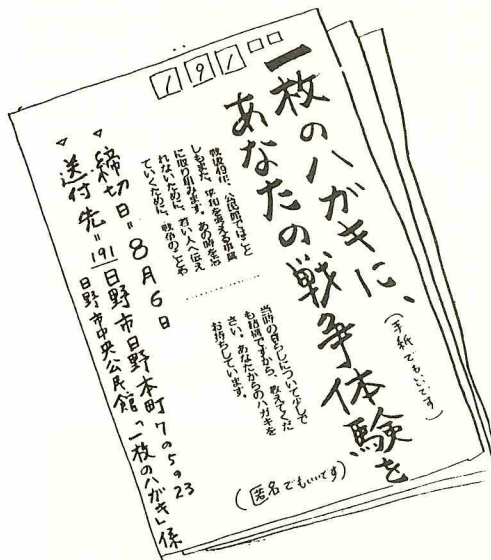
展示観覧者アンケート抜粋

- ◎八月一五日の敗戦をもっと重く扱い、毎年きちんと過去を反省し未来に過ちをおこさないためにも、ひとりひとり考える機会にすべきだと思う。「一枚のはがき」は書く方も書く気持ちになれるし、読む側も、思いを重くうけとめられた気がします。
- ◎何度もばくだんをおとされて戦争はやだなあと思った。(小学四年)
- ◎原ばくの様子がよくわしく書いてあったし、こんなこわいことがあったんだなと思った。「八才の夏こんなことが幾夜つづいただろうか」が心に残った。(小学四年)
- ◎昭和二〇年三月一〇日、私も地獄を見た。一四歳でした。(六三才)
- ◎戦争体験者がしなければならぬことは「戦争の実相を知ること、戦争をしてはならぬこと、そのために何をしなければならぬかを考える」ことだと思う。「一枚のはがきから」のように派手でなくても地道なものが心を打つ。(七〇才)
- ◎「はがき」の方と同じように悲しい思いでばかりです。私たちは再び戦争を繰り返してはならないと八月一五日を迎えるたびに肝に命じています。(六八才)
- ◎一枚のはがきの中に込められた平和の願いをひしひしと感じます。(六一才)
- ◎戦争を体験なさったみなさんの重みというのがじかに伝わってきます。

◎寄せられた方々の体験話、一枚一枚が歴史とそして実感は胸に秘めてこられたことだけにそまつにできないものがあります。(六二才)

◎肉筆の体験談ゆえにとっても迫力があり心が締め付けられました。(二四才)

◎本当は思い出しくなかつた事です戦争をくぐった人間として語りつがねばならない私です。戦争といのちの大切さを考えて一生懸命いきていきたいと思ひます。投稿なさつた方々と何かの機会にお会いして語り合えたらと願ひています。(七一才)



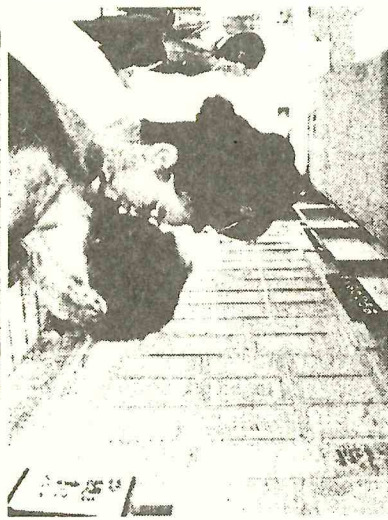
49年だって 消えぬ思い つづる

日野 戦争体験、はがきで記録

「アッ、つづる田にならなかつた」一日野市中央公民館で、約八十の市民が差出人となつたはがきを整理されている。テーマは、わたしの戦争体験。一枚一枚に、戦後四十九年たつても消えない、そぞろの思いが短く言葉でつづられている。

四十九日には「八月は何事だった。」

があつたハ・二五と平和を考へる」といふ同公民館の企画の「つづる」までの結構ですから」ときつやの結核で死ななかつたのは六十五歳の男性。年配の女性も「大事な人も大事な物もすべて無くした」と痛切な体験を記している。中には俳句や短歌の投稿もある。「嫁入の紋付明日の米ど化し」(七十八歳の女性)という句もある。一枚に書き切れず数枚に分けてつづった市民も多い。



展示中のはがきを興味深く読む市民たち
＝日野市日野本町「丁目の市中央公民館」で

するのにはおつたらなかつた。短くても、一人ひとり、の言葉で体験談を伝えてもらえはいい」と考えた。区画はすばやく超えた。今月六日で締め切つてからもう投稿が続いた。

すべて班長ゴビロ同館担当した同館職員佐藤章夫さん(冒)は「少しでもつづる機会になるのは戦時要員だけでなく」と書いた。市広報で投稿を呼び掛けた。「人前で話したい」かじめて体験談をはがきで戦争記録映画の上映や体験談を聞く会などに迎えて、初めて体験談をはがきで

「戦争の傷跡は、体験した。だれの心にも残っている。他人事として残っている。思い出したい」と佐藤さんは話す。寄せられた体験談は冊子にまとめるほか、来年の夏には閉館前に生立てたいという。展示は今月末まで。

日本国憲法 第二章 戦争の放棄

第九条 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

戦後50年記念平和事業
8月に何があった

一枚のはがき

1995年 8月15日

編集・発行 日野市中央公民館
東京都日野市日野本町7-5-23
☎(0425)81-7580

表紙：応募はがきから
町田市 藤原一路さんの版画

